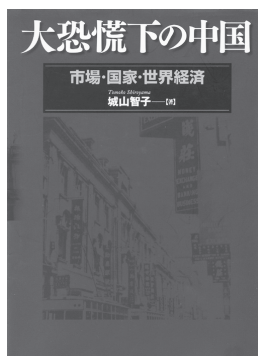


城山智子著

# 大恐慌下の中国

——市場・国家・世界経済

名古屋大学出版会／2011年2月／358頁／6090円



岡崎清宜

本書は、一九世紀末～二〇世紀前半の中国における工業化と信用拡大の過程を明らかにすることを通して、「中国をグローバル経済史の中に位置づけ」「近代中国における市場・国家間関係」（本書一七頁）の歴史的展開に「新たな視点」（二八頁）を提示しようとする意欲作である。問題意識の鮮烈さも類をみない。「財政規模に限界があり、また有効な産業政策を実行できなくとも、なぜ、政府は、最も重要で、かつ広域に亘る経済政策であった通貨制度の改革には成功したのであろうか」（二三頁）。城山氏は、一九九九年、ハーバード大学の歴史学部で博士論文、「China under the Depression: The Regional Economy of the Lower Yangzi Delta, 1931-1937」を提出しており、その後『China During the Great Depression: Market, State, and the World Economy, 1929-1937』（Cambridge MA: Harvard University Asia Center, 2008）や、『大蕭條時期的中国——市場・国家と世界経済（一九二九—一九三七）』（海外中国研究叢書、江蘇人民出版社、二〇一〇

年)を上木するなど、精力的に研究を發表されてきた。本書は、これらに寄せられた意見をふまえ、あらためて加筆・修正をおこなったもの、という。近年、大恐慌に関する研究の進展は目覚ましい。大恐慌期の中国をあつかう日本語版の本書の刊行は、まさに時宜にかなったもので、慶賀にたえない。

以下、その概要を紹介して、所見を述べたい。本書の構成は次の通り。

## 序章 近代中国の経済システムと世界経済

### 第一部

インフレと自由放任レッセフェルの時代——

一九三一年以前の経済動向

第一章 銀本位制——国際通貨システムにおける中国

第二章 工業化へ——揚子江下流デルタの繊維産業

第三章 企業借款——製造業の資金調達問題

達問題

第四部 大恐慌の時代、一九三二—三五年

政治経済の変容

第二章 大恐慌の時代、一九三二—三五年

政治経済の変容

第四章 農村恐慌

第五章 製造業の経営破綻

第六章 上海金融恐慌 一九三四—三五年

第五年

第三部 統治とその限界——南京国民政府経済政策の再検討

第七章 危機への対応——一九三五年

一月 幣制改革

第八章 景気回復と財政規律

第九章 経済復興の模索——政策の目的・手段・効果

終章 大恐慌は何をもたらしたのか——現代中国への展望

第一節は、一九三一年以前の近代中国の経済の分析である。近代中国の工業化を可能にしたものは、インフレ「期待」を前提とした制度と組織だった。それが、一九二九年以降のデフレ期になると、脆弱性をあらわし、危機に至ることが示唆され、たいへん興味深い。第一章では、中国と世界経済をつないでいた、銀本位制が説明される。中国の通貨システムは、メキシコドル、香港ドルなど、海外からの銀供給に頼っていた。国内外

の銀流通への政府介入はほとんどおこなわれず、銀価のコントロールもできなかった、という。第二章は、一九世紀後半以降の揚子江下流デルタにおける、綿紡績業と生糸製糸業の発展過程の概観である。どちらも、地元の農村を原料供給先とし、綿業は国内農村向太糸、生糸はヨーロッパ向高級品を生産した。原料産地と工場、消費地は、商人が結んだ。そのため一九二〇年代以降、市場の変容によつて原料の品質向上がもたられると、品質管理組織の欠如が問題になったという。第三章は、機械制繊維産業の資金調達法について検討する。「合股」や株式公募といった直接金融では、工業化に必要な大規模資金調達は難しい。そのため、一九世紀末から二〇世紀前半では、銀価下落によるインフレを前提とする、不動産・動産を担保にした銀行融資、すなわち間接金融によつて、長短の資金がまかなわれていた。生糸製糸業の発展をもたらした「租廠制」——工場所有者と経営者の分離——も、資金調達の問題を緩和させる手段の一つだった、と

の銀流通への政府介入はほとんどおこなわれず、銀価のコントロールもできなかった、という。第二章は、一九世紀後半以降の揚子江下流デルタにおける、綿紡績業と生糸製糸業の発展過程の概観である。どちらも、地元の農村を原料供給先とし、綿業は国内農村向太糸、生糸はヨーロッパ向高級品を生産した。原料産地と工場、消費地は、商人が結んだ。そのため一九二〇年代以降、市場の変容によつて原料の品質向上がもたられると、品質管理組織の欠如が問題になったという。第三章は、機械制繊維産業の資金調達法について検討する。「合股」や株式公募といった直接金融では、工業化に必要な大規模資金調達は難しい。そのため、一九世紀末から二〇世紀前半では、銀価下落によるインフレを前提とする、不動産・動産を担保にした銀行融資、すなわち間接金融によつて、長短の資金がまかなわれていた。生糸製糸業の発展をもたらした「租廠制」——工場所有者と経営者の分離——も、資金調達の問題を緩和させる手段の一つだった、と

される。

第II部は、中国経済への大恐慌のインパクトが考察され、中国政府への介入期待が高まる過程をえがく。第四章は恐慌期中国の農村崩壊の分析である。農家経営は収入と支出の時間的ミスマッチから多額の債務があつた。農産物価格の継続的下落による交易条件の悪化と農家の債務不履行。銀の都市流出による農村金融の流動性危機。農家経営は「現金の飢饉」に陥っていた。機械制織維産業も事情に大差はない。第五章は、銀行の信用収縮と、製糸業と綿紡績業の経営破綻を明らかにする。製糸業は、満州事変以前から価格下落に直面し、事変以降、元の急騰で生糸価格が暴落すると、農家に負担転嫁して原料繭の劣化をまねいた。綿紡績業は、長江大水害・国共内戦・満州事変によって生産縮小を強いられ、輸入綿の関税軽減をもとめたが、政府は逆に国産長絨維綿増産のため関税引上げさえ行ったという。銀行は、貸渡りや担保物件の処理、工場経営の直接管理などで対応したが、十分ではない。第六章は、そ

の必然的結末、上海金融恐慌の考察である。大恐慌最初の二年は、国際銀価暴落で上海に銀が流入し、不動産・公債投機と信用拡大がおきた。だが一九三一年九月のイギリスの金本位制離脱以降、銀価上昇にともない、貿易赤字と資金流入減少のため、中国から銀流出がはじまる。アメリカの銀買い上げ法の施行は、銀価急騰と銀の大量流出をひきおこした。上海金融市場は不動産取引の崩壊で流動性を失い、金融機関は深刻な経営危機に陥った。もはや銀本位制から離脱するか方法はな

い。第III部は、世界恐慌に対応する過程で実行された、中国政府の経済政策の効果とその限界が論じられる。第七章は、一九三五年一月の幣制改革をめぐるイギリス、アメリカ、日本との外交交渉と、国内金融機関への政府の対応の分析である。政府財政は市場からの「信任」がなく、政府の通貨管理は市場から支持されなかつた。幣制改革後、中国政府は、民間銀行から優遇策によって銀を回収する一方、ポンドやドルと安定的にリンクさ

せ、慎重な通貨管理をおこなつた。アメリカへの銀売却による為替準備金の確保は、対外開放性を維持したままの通貨改革の実施を可能にしたという。第八章は、幣制改革にともなう、中国政府の経済政策の限界を明らかにする。通貨の切り下げと為替レートの安定は、景気の着実な回復をもたらした。だが財政均衡による法幣安定と対外開放性を指向する中国政府は、軍事費増大の政治状況の下では、積極財政をおこなう余地がない。第九章では、江蘇省の製糸業と綿紡績業、農村金融の事例から、南京国民政府の経済政策を検討し、財政制約下、製造業・農業部門を直接改革する手段に乏しかったことを強調する。実業振興政策も協同組合を通じた品種・製品の改良などであつて、政府資金は限られた。農村復興政策も、協同組合や農業倉庫などの「受皿」の育成が重視され、農民銀行や民間銀行の融資の呼びこみを目指すなど、穏健なものであつた。流動性の供給すら民間同業団体にまかされ、中央銀行はおこなわなかつたという。

かくて著者は、中国近代史の経験をふまえ、終章で現代中国の課題を摘出する。現代中国のマネタリー・レジームは、低落するドルと固定為替でリンクすることで、輸出主導型経済成長をめざすものであった。リーマン・ショックは、中国経済成長の源を投資・輸出から個人消費に転換することを遅らせた。現在、レジーム転換の困難から過剰流動性に苛まれ、「和諧社会」の実現はほど遠い。大恐慌期の中国は、各国が閉鎖経済を採用していた時代、対外開放性と政策形成の自律性のジレンマでは後者を犠牲にした。両者のどこに最適点を見いだすのか。現代中国は、再び選択をせまられているとして、擱筆する。

以上の拙い要約からも、本書が多様な内容と論点を含む大変な労作であることは、容易に推察されよう。著者は、中国やアメリカの未刊行史料なども使いながら、先行研究を巧みに咀嚼して、近代中国の工業化と金融、市場と国家の関係を丹念に跡づけてゆく。なによりも最大の貢献は、従来知られていた幣制改革後の

自由な外貨取引や財政均衡、「経済行政の強さと弱さのパラドクス」(一三頁)などに、「マクロ経済政策のトリレンマ」——為替レートと安定性と資本の自由な移動、金融政策の独立性のうち、二つまでしか同時に達成できない——を採用することで、整合的な理解を与えたことにあるだろう。世界経済における近代中国の位置や役割を考える上で、本書は必読書といっても過言ではあるまい。以下、若干のコメントをおこない、評者の責をふさぎたい。

まず理論的枠組について。「金融政策の独立性」の制約のあり方は、国や時代によって一様ではないとしても、あたかも対外均衡のため財政政策を割り当てたかのごとく、金融政策の分析を捨象したまま、トリレンマ成立を前提とする論述には、やや違和感がのこった。ポンドとリンクによって、ほぼ同様の制約下にあった日本を考えると、経済行政の「弱さ」自体は、トリレンマとは別の論理も必要に思われる。また一九三〇年代と現代中国は「対外開放性」で共通するとし

て、経常収支赤字⇨資本輸入国の経験から、経常収支黒字国である現在を論じるのは、いささか無理があるのではないか。現代中国は変動為替相場制に移行しても大きな問題はあるまい。そうなれば、対外開放性か、政策形成の自律性かのジレンマはない。現代中国は、農村余剰労働力を重視し、経常黒字でありながらドルとペッグを続けた。そのためアメリカ連銀の金融緩和政策に追従せざるをえず、過剰流動性に苦しんでいるにすぎない。人民元の切上げ問題は、変動相場制移行を求めたものであろう。かりに現代中国にジレンマがあるとすれば、それは一九三〇年代の経験とはちがいが、為替レートの安定性と政策形成の自律性に該当するのではないか。

以上と関連して幣制改革の位置づけも気になった。紙切れの貨幣は、幣制改革によって、銀とのリンクからポンドやドルとの安定的なリンクに移行した。当然、マネタリー・レジームの転換、「銀本位から管理通貨制へ」は観察できて、財政金融政策の制約の根本的な変化

は起きづらい。ならば本書の枠組で重要だったのは、財政制約からの解除をもたらず、資本の移動規制——日中戦争勃発直後の預金封鎖・法幣外通貨の出現や、一九三八年以降に本格化する為替管理など——ではなかったか。本書は、「中央政府が統一的に紙幣を発行し、通貨をめぐる市場との緊張関係に入るに至った」として幣制改革に「重要な意味」を与えたが（二七六頁）、望蜀の言とはいえ、日中戦争と国共内戦の戦時経済期の専論がないのが惜しまれてならない。国民政府の抗戦力と財政インフレは重要な論点だからである。

次に不動産担保金融について。本書の白眉は、列強の中国侵略のシンボル、上海租界こそ工業化を可能にした制度との指摘にある、といつてよい。ただ中国企業 の困難は、購入では代金前渡（九三頁）や現金買（八四頁）、販売では信用売を強いられがちだったことにある。だからこそ、原料・製品などの動産が抵当に出され（九六一―九七頁）、「放紗収布」（六一頁）がおきたのではないか。

そうであれば、バブル崩壊後、不動産担保金融が単なる再建に向かわない（二四二―二四三頁）ことは、「トリレンマ」とは別の論理からも理解できよう。もともと銀行票据承兌所（二四三頁）は、動産抵当貸付を銀行引受手形におきかえるねらいで現れ、掛売への為替手形の導入とともに、再割引適格手形創出の構想の一環であったことを、かつて評者は論じたことがある。不動産金融再建より根源的な、現金買と信用売の解消、とりわけ数億元もある信用売——担保にだせないもの——の改革の試みに光をあてても良かったのではないか。掛売への手形の導入は、承兌所構想も含め、結局、蹉跌におわった。近代中国における市場・国家の関係——租界内外にまたがる商慣行と法のずれもその一つ——は、実証研究を通じて説明に参加すべき中核的課題であることを、本書はあらためて教えてくれる。

最後に細かい疑問を指摘しておきたい。本書は、一九三二年以降の銀行の工場経営管理を画期とし、デフレによ

り「担保物件への信用に基づく融資は不可能となった」（一六一頁）とするが、その後も不動産や動産の担保話が絶えない。実際、銀行の動産抵当貸付の拡大は、農村投資に関する従来の研究でも指摘されている。担保評価額の何割まで貸すか、期限をどうするか次第ではないか。また、幣制改革以降、「全体としての通貨供給量の増加は、七億元余り」（二二二頁）とあるが、二〇〇六年論文では二億七千万円であった。前稿と推計法が同じなら一億七千万円と思われる、推計方法の修正か、誤植なのか、判然としない。上海金融恐慌についても三点ほど。「一九三五年二月に期限を延長した債権は、四月に期日を迎えた」（一八六頁）は、三節季の一つ旧暦正月前の帳簿締めと、四月と一〇月に更新される長期信用貸付、それぞれ別個の債権を混同している。期日は、六月初旬、旧暦の端午節前に迎えた。また、上海金融恐慌への錢荘の対応策が「錢荘が発行した小切手以外は換金しない」（一八七頁）とされているが、銀行の小切手・手形の換金義

務は、元来、錢莊にあるまい。受渡は現金ではせず莊票でおこない、銀行が錢莊に莊票を呈示してもその支払を拒絶する——錢莊が発行した小切手も換金しない——ことではないか。なお「寧波商業貯蓄銀行や中国商業銀行」(同)は、「四明商業儲蓄銀行や中国通商銀行」と訳すべきだと思われる。

紙幅の都合上、なべて無いものねだり感漂う書評となり恐懼にたえないが、経済学と歴史学、どちらにもインスピレーションを与える、中国史の粹をこえた刺激的な大著にあらためて敬意を表したい。誤解や的外れな点があれば、ご海容いただければ幸いである。

#### 注

(一) (前略)：同行匯劃(按即以莊票劃來劃出、不支現款、並不与銀行匯劃)。

〔財部撥發公債救濟錢業〕『銀行週報』

一九一二、一九三五年を参照。